

見えないマークに目を向けて

神奈川県 横浜市立南高等学校附属中学校 3年

森 彩夏 (もり あやか)

妊婦さんがつけるマタニティマーク，体や心に何らかのハンデがある方がつけるヘルプマーク。日々色々なマークを目にする機会があるでしょう。マークは文字の読めない小さな子供にも分かり，それをつけるだけで見た人は理解し手を差し伸べられる，とても便利なものです。

では，こんなマークを知っていますか。「わけあってこちら側で止まっています」その言葉とともにエスカレーターのイラストがかかれています。私は知りませんでした。電車の乗りかえでエスカレーターを利用した際，初めてこのマークを目にしました。もちろん文字を読むことができるので理解はできます。でも「わけあって」とはどういうことなのか分かりませんでした。その駅にはいくつもの路線が集まり，エスカレーターにもたくさんの人が溢れていました。そんな中でそのマークをつけた男性がエスカレーターの右側で止まっていたのです。男性の後ろには長い列ができていました。そのことに腹を立てた方がその男性に「早く進めよ。右側は歩く奴が乗る側なんだよ。」とどなり立てたのです。男性はただただ申し訳なさそうにしていました。私は「何か訳があるみたいですよ。」と声をかけるか迷いましたが結局声はかけられませんでした。家に帰ってからふとそのことを思い出し，そのマークについて調べてみました。「マナーアップキーホルダー」というらしいそのマークは，体の麻痺などをかかえる方向けだそうです。例えば，体の左側が麻痺している方は右側で手すりにつかまらなくてはいけません。けれども多くのエスカレーターでは右側が歩く人用というまちがった暗黙のルールが生まれているので，そうした人たちが右側で止まりにくいことがあります。そんな時，そのマークがあれば麻痺を抱えた人も，その後ろにいる人も嫌な気持ちにならずに止まっていることができます。私はいいアイデアだなと心から思いました。

しかし，同時になぜマークをつける必要があるのだろうかと思いに思いました。何らかの事情があるのだろうかとおおらかに考えられればこのマークはいりません。きっとエスカレーターの右側で止まるという本当に小さなことすら，許せないような雰囲気があるからだと思います。もしも自分がマークをつけなくてはいけなくなったら今の社会はとても生きづらいものなのでしょう。では理想の社会とは何だろうと考えたとき，私はマークなどつけなくても互いに互いの違いを尊重し手を差し伸べられるような社会だと思います。互いの違いを尊重することはお

互いの人権を守ることであります。

私は今年の春、初めて松葉杖をつきました。松葉杖はマークと同じくらい、自分が怪我をしているということを周りに知らせます。私に気がついたたくさんの人がバスで席をゆずってくれました。時には荷物を持ってくれる方もいました。私にとって歩くのはとても難しいし、揺れるバスの中で立つのも難しいことでした。だからそうした人たちの温かい気持ちにふれるたび私はとても嬉しい気持ちになりました。そんな経験から誰が、いつ、どんなハンデを背負うかは分からないけれど、そうした時に手をさしのべてくれる人がいたとしたらきっととても救われるのだろうと思うようになりました。

そして私は自分が分けてもらった優しさを今度は誰かをたすけることに使っていきたいと思いました。

もちろんマークをつけている方への配慮は必要です。でも、それだけではなくて周りの人に心配りをすることが理想の社会の実現に不可欠なのです。見ためではわからない、いわば「見えないマーク」に気がつくことは難しいことかもしれません。時に空回りすることもあるでしょう。でもそうやって周りの人たちに気にかけることでいつか優しさに溢れた社会に近づいていくのだと思います。いつの日か、マークなどつけなくても互いを助け合えるような社会にしていけるかは自分たちの行動次第なのです。